



III 海外だより

ファースト レディー今昔物語

ニッセイ基礎研究所

ニューヨーク事務所 主席研究員 熊坂 有三

大統領のビルとヒラリーを結びつけヒラリー政権とよばれるようにヒラリー ローダム クリントンの政権内での影響力は凄い。ホワイトハウス内では彼女を国内問題に関する首相と呼ぶ者さえいる。例えば、司法長官候補の選択にたいして大統領がその候補と個人面接するのは分かるが、その司法長官候補はヒラリーとも個人面接をせざるを得なかった。しかもその面接に要した時間は大統領が行なった個人面接時間の倍もかかったという。選挙中にビル クリントンが宣伝文句によく使われる「Buy one, Get one free (一つ買えば、もう一つがただで貰える)」と言っていたようにビルは当初から政権内でのヒラリーの役割を考えていた。通常ファースト レディーが給与をもらうなどの正式な形で政権内の職に付くことが法律上難しいことから、昨年ブッシュがホワイトハウスで開いた最後のクリスマスパーティーでは「クリントンはヒラリーを閣僚に指名する一方、バーバラ ブッシュとファースト レディーの4年契約を結ぶのが良い」との冗談がでたほどである。それゆえ、米国の最も深刻な問題のひとつである医療制度改革のリーダーに彼女が無報酬で任命されたのも不思議ではない。更に、これまでのファースト レディー達がホワイトハウスの“東の翼”の建物に仕事部屋などをもっていたのに対し、ヒ

ラリーは通常男性の上級アドバイザーがいる“西の翼”の2階に仕事場をかまえた。これはファースト レディーの仕事が従来の寝室や応接間などの模様替えから大きく変わるべきとのベビーブーマー世代のヒラリー政権の実験と見ることができる。もはやファースト レディーであることがヒラリーをいかに変えるかという考えは消え失せ、ヒラリーがどのようにファースト レディーの役割を変えるかに人々の注目はある。では一体これまでのファースト レディーはどんな役割をしてきたのであろうか？

— ファースト レディーは損な役 —

ファースト レディーに関する話題は事欠かない。とにかくマスコミや国民がファースト レディーに求めているものは“完全さ”であり“完璧さ”である。例えば、ファースト レディーとして喋りすぎるでもなく、かといって無口すぎず、またお金に関しては浪費することなく、けちることもなくである。外国にできれば米国民の良き代表であり、国内では良き子供に囲まれた、完璧な家庭の母であることを求められている。もちろん彼女の着るもの、家具などへの趣味についても完璧さを求められる。こうなるとファースト レディーのあらゆる扱いは簡単である。いやこのようなことだけでは

すまされない。レディー バード ジョンソン^(註)はファースト レディーになると知っていたならば、鼻の整形をしておくべきだったと後悔していた。ヒラリー クリントンのストッキングの色までも問題になる。太い脚なのだから黒のストッキングにすべきだ、いや黒でもあの太い脚は隠せないと世間はかまびすしい。メアリー リンカーンは市民戦争の時に、親戚が南軍同盟にいたために、謀反者扱いにされたし、マーサ ワシントンは大統領就任式の時に58才だったため、ファースト レディーには年寄り過ぎると言われた。逆に、ジョン タイラーの2度目の妻ジュリアは24才ゆえ若すぎると言われる。ましてパイプタバコを吸ったとなれば、マーガレット テイラーは下品とレッテルを貼られた。このようにファースト レディーというのは絶え間ない詮索と止まぬ非難を受けながら、最も要求されることの多い、しかも無給の職と言える。

初代のマーサ ワシントンから5代目エリザベス モンローまでのファースト レディーは裕福な家庭の女性であり、何人かはヨーロッパに修養に出かけ王室の人々と交じりあうなどアメリカの女王たるべく教育を受けた。しかし、その後サラ ポーク(11代)、マリー リンカーン(16代)を除いたジュリア グランド(18代)までのファースト レディー達は平凡な新しいタイプの大統領の妻達であり、目立たぬ事を好んだ。彼女らはほとんどの時間をホワイト ハウスの2階で過ごし、わざわざ階下に降りてきて彼女らがどう振舞うかなどの世間の批判を受けることを好まなかった。マーガレット テイラー(12代)は夫の対抗馬であるルイス キャスが勝つ事を祈り、夫が勝つや部屋から出なくなった。ジェーン ピアース(14代)は夫のフランクリンが大統領候補に選ばれると気を失ってしまった。彼女はホワイト ハウスで暮らすことなど考えただけでもいやで、結局最

初の6カ月間はホワイト ハウスに入らなかった。またエリザ ジョンソン(17代)はファースト レディーの間にたった2回だけ公式な場所に顔を出しただけで後は全く何をしていたか分からない不可解なファースト レディーである。このような“目立たぬファースト レディー”の時代はジュリア グランドで終わった。ジュリアはスポットライトを好んだ。しかし、幾分斜視でもあり彼女はいつもカメラから顔をそらすようにしていた。彼女は困っている人々に対して非常に優しく、いろいろな施しをしたばかりか、彼等の苦しみを学ぶ為には彼等をホワイト ハウスに招きもした。また彼女にはエコノミストの才能があり、近い将来のワシントンの住宅価格の急上昇を予想し、ホワイトハウスの召使い達に住宅購入を勧めた。ぐずぐずしていつまでも買わないハリスという召使いには自分で彼の家族のために住宅を買い、彼の給月から月々天引きをしたという。ジュリアが斜視の手術をしたがった時に、大統領のユリシスはやさしく「斜視の君が好きだ」と言った。グラント夫妻がホワイト ハウスの最初の“スター”家族といえる。

——サラ ポーク(11代)：徹底した内助の功——

ファースト レディーがオフィスを持ち、公式のメンバーとして大統領を助けたのはサラ ポークが最初である。彼女がヒラリーの先例といえる。彼女はファースト レディーのなかでも最も知的で評判の良い一人である。サラのオフィス机は大統領の机の右にあり、彼女は無給だが正式なアシスタントとして一生懸命働いた。彼女は閣僚メンバーや政治的要人と会うことを大統領から求められたし、彼のスピーチや手紙の原稿書きも行なった。政治が女性の仕事でなかった時代において彼女は全ての公的問題に精通していた。しかし彼女はその知識を見せびらかすことなく大統領のジェー

(注) 本名はクロードディア。レディー バード(テントウムシ)のあだ名は彼女が生まれた時非常にかわいく、黒人の看護婦の腕の中にいる彼女はまさにテントウムシのようだったという。

ムズを助けた。彼女はあくまでも夫の影に隠れていた。それは1840年代の完全な女性の重要な要素であった。彼女は人前で決して夫に忠告するようなことはしなかったし、人目を引くようなわざとらしい行動も決して取らなかった。彼女はすべての手柄を夫のものにした。それゆえ、1880年に未亡人となったサラを訪れたある人は「彼女は夫への賞賛の中に自分を失ってしまった」と言っている。サラの政治への洞察力は高く、後の大統領であるフランクリン ピアース（14代）は彼女の夫のジェームス ポークも含めてだが、他の誰よりもサラと政治の話をするのを好んだと記している。

ポーク夫妻はホワイトハウス内でのダンスを禁止するなどパーティーをこのまず、また外でのディナーへの招待もなるべく断わり、出来る限りの時間を国民のために費やした。ポーク大統領は閣僚メンバーは休暇やつまらぬことに多くの時間を費やすため、彼等からのアドバイスは信用出来ないといい、彼はサラからのアドバイスに全幅の信頼をおいた。彼女がファースト レディーであった1848年には何人かの女性と男女同権を主張し、この当時は信じられない女性の選挙権を提案している。彼女はきわめて進歩的であったばかりか、他人への気配りも怠らなかった。例えばディナーにある作家を招待すればその作家の才能に対して無知であることを失礼と思い、彼女は朝早くから出来るだけ彼の本を読んだという。サラのファースト レディーとしての振りまいをみると、ヒラリーは今の時代に生まれてラッキーと言える。

—— マリー リンカーン（16代）：

イメルダ マルコスも顔負け ——

若い時のマリーは美人であり、彼女がいれば司教が信者を忘れるとまで言われた。彼女のニューヨークへのショッピングには報道記者が付いて回った。信じられないほどの多くの着ることもない服を注文し、彼女の衣装タンスは手を通さない服で

一杯であった。夫のエイブラハム リンカーンが戦争に従事している4カ月の間に彼女は300もの手袋を買った。彼女はなにしろ宝石、衣服、家具、香水と目に入るものはなんでも買ってしまふ。夫が死んだときの彼女の借金は27,000ドルになっていた。この当時の労働者の週給は10ドル以下である。彼女は自分の浪費が夫に知られるのを恐れ、友達のエリザベス ケックリーにこう言っている。「もしも彼が再選されれば、私の浪費が彼に気づかれないですむが、彼が負ければすべての請求書が送られて、彼に全てがバレてしまふ」と。老後に彼女が保護収容所にはいったのもうなずける。

—— フローレンス ハーディング（29代）：

ハンサムな大統領は冬彦タイプ ——

フローレンスは30才の時に子供を一人抱えて25才の後に大統領になったハーディングと結婚した。ハーディングは在職中に内務長官の汚職問題が起きるなど大統領としての資質は彼には全くなく、歴史家達の評価でも最悪の大統領である。これは無理もなく、彼がハンサムであり、優しく人々に好感をもたれたことは確かであるが彼自身、自分は大統領の器ではないと認めている。彼は選挙中にも大統領候補を辞退したいとフローレンスに伝えている。それを聞いたフローレンスは困惑し、水晶玉占いにみてもらい彼が勝つと告げられるや嫌がる夫を再び大統領レースに戻した。彼女は夫を支配し、けしかけ、彼女の思うように愛した。彼女は夫の昇進のために何でもするといっているし、ある時インタビューに「私の本当の唯一の趣味は夫だ」とも言っている。それゆえ、彼がホワイトハウスに入っても地元の“オハイオギャング”達に囲まれて収賄事件などを起こしたのもやむなしとうなずける。ハーディングが変死をした時、フローレンスが毒殺したとの噂がでた。大統領製造家としてのフローレンスは夫の死後1年と100日目に死んだが、夫の隠していた愛人間

題など多くのスキャンダルをその短い間に知り彼女は夫として弱い男を選んだ自分を責めたという。

—— エレノア ルーズベルト：ヒラリーの理想 ——

過去のファースト レディーの中で最も影響力の大きかったのはエレノア ルーズベルトであろう。若い時の彼女はあまり美しくなく、はにかみやであり、他の人の注意をひくような娘ではなかった。しかしあるとき偶然に遠い従弟にあたるハーバードの学生であったハンサムなフランクリン ルーズベルトに出会う。学生ながらもプロポーズしたフランクリンはまだ若すぎると母から長い西インドへの航海の旅に出されたが1年半後に二人は結婚している。ファースト レディーとしてのエレノアは素晴らしい。国連のウタント事務総長は彼女を世界のファースト レディーと言い、ラスク国務長官は彼女は世界の貧困、不正義、偏見などを憎むのではなく、それへの憤りから情熱的な抗議を続けたと評価している。めったに米国人を誉めないソ連の国連大使のヴァレリン ゴーリンさえも、彼女の心の中に全ての人々への暖かい思いやりを見ることができると言っている。

彼女は人種問題にも進歩的であった。ある日の午後、彼女の黒人の友人がオフィスを訪れ、二人でレストランで食事をしようとしたところ、友人がレストランから拒否された。そのときから彼女はレストランが黒人に席を与えるまでそのロビーで食事をした。離婚についても夫婦が一緒に生活することが不可能と理解しあえば、離婚も必要な権利でもあると主張している。もちろんこの当時のカソリック教会から怒りをかったことはいうまでもない。彼女は労働長官に女性を起用することを夫に勧め、はじめての女性の閣僚を誕生させている。日常の大統領の仕事の中でも社会福祉機関の会議には大統領のかわりにするなど、彼女は夫の仕事をよく助けた。大統領も彼女の仕事を信頼し、自由に彼女に仕事をさせた。彼女としばしば意見が異なるときがあっても、フランク

リンは「ここは自由な国だ。私は私のやり方でアメリカ国民に私の意見を伝える。もしも君が私を煮え湯にほうりこむようなことがあったとしても、自分で何とかするから心配ない」とエレノアに言っている。ここに素晴らしい二人の信頼関係をみることができる。彼女の仕事は“人々”というように彼女の人間尊重の態度は素晴らしかった。このことはフランクリン ルーズベルトの死後にもトルーマン大統領が国連への代表として彼女をおくり、彼女が国連人権問題の委員会の議長になったことから理解できる。この後も、彼女は国連関係の仕事で世界に貢献した。

こんな彼女であるから、衣装、化粧などにもあまり余りこだわらず、貧しい人々の救済にいろいろな地域にも一人で出かけた。大統領には19セントの昼食を出すなど、食事は体へのガソリン程度にしか考えていなかった。そのためホワイトハウスへ招かれた客はいつも出される食事に不平を言う出す始末だった。英国から女王夫妻がきたときも、ブラックタイの晚餐でなく、ピクニックでホットドックというスタイルで招き物議をかもした。

—— エリザベス トルーマン (33代)： ——

目立たぬファースト レディー ——

副大統領だったトルーマンはフランクリン ルーズベルトの死によって大統領に繰り上げされた。それゆえ彼女は「私は選ばれたのではないから国民に向かって言うべき事はない」と言った。ベス(エリザベスの呼び名)トルーマンはきわめて家庭的な女性であった。もちろんエレノア ルーズベルトが行っていたファースト レディーのプレス コンファレンスなどは拒否したし、シークレット サービスマンも断った。なにしろ彼女自身が世間の注目的になるのを極力嫌った。ある晩にベスが友人のパール メスタとパールの人生を描いたブロードウェイのチョウ“コール ミーマダム”を見に行った。誰にも告げていないので

彼女らは切符売りの行列に並んでいた。劇場の案内係がベスを見つけ、行列の先頭に連れていこうとすると、ベスは丁寧にそれを断わり行列の中で順番を待った。トリオのバンドが彼女らを席に導くと劇場の観衆は驚き、拍手をし始めた。パーマメスタが立上りおじぎをした後にも拍手は止まらなかった。謙虚なベスは困りはて、パールにもう一度立ち上がって（私の替りに）観衆の要求に応えよと言った。彼女にとって国よりも夫がまず第一であった。彼女は「淑女というのは一生のうちで3回新聞に名前が出るという。生まれた時、結婚した時、死んだ時だ。それ以上名前が新聞にのれば、その人は淑女ではない」とよく言っていた。

— マミエ アイゼンハワー（34代）：

国民に最も慕われたファースト レディー —
国民だれもがアイゼンハワー大統領を好み、マミエを慕った。それは彼女が何かをしたからではなく、彼女がどうであったかである。彼女はアビゲイル アダムス、サラ ポーク、ベス トルーマン、エディス ウイルソンのように国に係わる問題に対して大統領である夫のアドバイザーでは決してなかった。エレノア ルーズベルトがしたように彼女自身の言葉や行動で政治、公共政策に影響を及ぼすこともしなかった。またフローレンス ハーディングやヘレン タフトのように夫を大統領に駆り立てるようなこともしなかった。彼女は何等ファースト レディーとしてドラマティックな前例を残したわけでもなく、むしろホワイトハウスの歴史の中では最も行動力がなかったファースト レディーの部類に入る。彼女は平均的な米国の妻達や母親達が簡単に理解できる女性だったと言える。アイゼンマワー大統領は彼女の持つ愛敬、親しさ、他の人々への暖かい関心、全く気どらない様をホワイトハウスの大きな資産と評価していた。この当時の米国民が必要としていた母親のイメージをまさにこのファースト レディー

のマミエが持っていたといえる。しかし彼女が見せた微笑みほど彼女は幸せではなかった。彼女は夫の軍隊生活に付添い36年間の放浪のような生活をしたし、3才になる長男をしょうこう熱で亡くした。息子の死への彼女の悲しみは非常に深く、人々は彼女の精神的健康を心配した。次男のジョンが生まれた時には彼の健康にとりつかれるようにさえなった。またマミエはフランクリン ルーズベルトが心臓発作に襲われるや、彼女は夫の健康を心配し、政治を止めるように忠告した。しかしもちろん彼は政治を続け、米国の父たる役目を果たした。そのためにマミエも米国の為に良き母であるように装った。結局ホワイトハウス時代のマミエは夫の健康を気づかい、長男の死を悲しみ、戦争にいった次男をいつも思いやっていた。そのため、彼女自身も不眠症、偏頭痛に悩まされており、朝早く起きても昼頃までベッドにいた。そこで新聞を読み、彼女は好きな色のピンクのガウンを羽織り、ピンクのテーブル盆の上でもらった手紙の返事を書いていた。彼女は時折ピンクのベッドの回りでスタッフ ミーティングを行なったが、スタッフが“世界は回る”のメロドラマの時間帯に来ると彼等はコマーシャルになるまで待たねばならなかった。こんなところに米国民も親しみをおぼえたのであろう。

— ジャクリン ケネディー（35才）：

政治には無関心 —

ジャクリンは最もいろいろなことが書かれているファースト レディーである。しかし彼女が最も政治に無関心であったことも事実だろう。彼女は31才でファースト レディーになるやホワイトハウスを酷い所と言っている。彼女のインタビューはしばしばケネディーの足を引っ張った。あるレポーターに民主党の全国大会の開催地として何拠がいいかと聞かれれば彼女はアカプルコと答えた。新聞、ラジオ、テレビで彼女の衣服への支出が多すぎると批判されると、くろてん皮の下着を着な

かったならば、年に3万ドルは使わなかっただろうと答えている。彼女は重要な民主党の政治家とも会おうとしなかったし、大統領の妻として期待されている儀礼的なことも怠った。また彼女はひいてもいない風邪を口実によく使ったし、子供の事をも断る口実によく使った。そして彼女はどんなに忙しくとも毎日1時間は子供と過ごした。仕事もその日の終りの時間を必ず美術プログラムなどの芸術関係にあてた。

彼女は何ひとつファースト レディーの従来の役割を変えなかったが、ホワイト ハウスでの彼女の功績はパブリック リレーションの成功にある。ホワイト ハウスでもてなしを一流のものにしたし、室内の装飾も専門家が絶賛するほどに変えた。そう簡単には驚かないドゴールのような客人も彼女のとりこになった。彼女の2年10カ月のファースト レディーの役は余りにも悲劇的な終りを迎えたが、ファースト レディーであったことが、その後の魅惑的な生活に彼女を導びき、ジョン ケネディーの暗殺の苦痛が幾分は和らげられたのではないか。あるとき、ジャクリーヌは次のように言っている。「ホワイト ハウスに住んだものは誰でもその伝統を維持し、それを高める中で自分自身の何かをそこに残さねばならない。」

—— レディー バード ジョンソン (36代) :

素晴らしい人柄 ——

レディー バード ジョンソンの最大の貢献は大統領への助けというよりも彼女自身の作成したプログラムである。ハイウエーの美化法案を通すなど彼女の名前は環境の美化と同義語にまでなった。国民のレディー バード ジョンソンへの人としての賞賛と尊敬はリンドン ジョンソンが死んだ時に、彼女のもとに届いたお梅やみの手紙が7万5千以上にもなったことから伺える。

—— パット ニクソン (37代) :

根性あるファースト レディー ——

リチャード ニクソンが多くの問題を起こしながらも非常に長い間政治的な注目の的になっているのにはパット ニクソンの堅固な人格によるところが大きい。人々がリチャード ニクソンにどんな厳しい質問もしようとも、彼等がパットの彼への揺るぎない擁護をみると和らいだ。即ち、パットが彼を信じているならば、何故国民が信じられないのかということになってしまう。ニクソンが政治家としてトップになった1968年頃までに、パットはしばしば無視され続けた妻になっていた。彼女は毎日4時間をかけてホワイト ハウスにきた手紙の返事を書いた。ホワイト ハウスの記録をみても大統領は彼女と一日に平均30分から1時間だけ一緒に過ごただけだ。しかし、ウォーター ゲート事件の間、彼女は何時でも国民の前にニクソンと一緒に立っていた。彼女がそのときどのように考えていたかは他の者にとってのよしもない。彼女は1976年に発作に襲われたが、彼女はニクソンにそのことを何も告げていない。ニクソンは彼女がベッドからでるのに苦闘しているのを見て、なにか変だとやっと気がついた。最初のデートの後にすぐ結婚を申し込んだニクソンを扱いにくい、妄想的な男とパットが終生思っていたことは間違いない。

—— ベッティ フォード (38代) : 苦から

逃げ出さなかったファースト レディー ——

ベッティ フォードが多くの人から尊敬されるのは、彼女がどんなに深刻な問題に直面しても、それを隠すことなく前向きに対処し克服していったことにある。彼女はおとなしい、素敵な法律家と結婚したかったとっているように、政治的野心のあるフォードには向かなかったのかもしれない。フォードは大統領になる前にさえ、年間約200の講演で家を留守にしている。毎年半分以上フォードがいないなかで、ベッティは多くの政

治家の妻に要求されるように、完全な女、完全な妻、完全な母親になろうと試みた。そんなことからストレスがたまり、アル中、麻薬中毒になってしまったが、彼女はこのことを国民に隠すことなく多くの医師にみてもらいながら治療を続け、ついにそれらを克服した。ホワイトハウス時代のベッティー・フォードの行政アシスタントのナンシー・ハウは彼女の人生のなかでベッティーは本当に特別な人だったといい、毎月の自分の給与を返すべきだと感じていたと言う。

——ロザリン・カーター（39代）：

ミニヒラリー版 ——

近年でファースト・レディーとしての公式的な役割をもっとも担ったのはロザリン・カーターであろう。彼女は特に精神医療改革に活動的であった。彼女は大統領委員会の名誉会長として働き、毎日30のタスクフォースを管理し、上院の医療委員会の証言にもたっている。彼女の働きは1000ページにのぼるドキュメントになっている。その中で、住宅、医療保険、メディケア、メディケイド等の改善、権利の反差別化、精神医療センターの改善を求めている。カーター図書館にある1980年7月24日のメモによれば、ファースト・レディーのロザリンは自分がペルーに行く前に精神医療問題に関するある法案を通過させるためには下院議長のティップ・オニールの腕を捻りあげる用意があるとまで言っている。結局、彼女は1980年の精神医療制度法案を通過させた。

カーター大統領がロザリンを自分自身の延長といているように、この夫婦の政治的関係の強さはルーズベルト夫妻以来のものだろう。彼女は“東の翼”にファースト・レディーとして始めて公式のオフィスをもち、毎朝9時にビジネス・スーツにアタッシュ・ケースを持ってそこに行った、ロザリン自身、政権内での自分の役割を夫とは独立した価値あるものとしてみている。彼女は閣僚会議にも当然なこととして同席した。ヘレン・タ

フトが閣僚会議に興味を示し、いつもドアの外で聞いていた以外、ファースト・レディーが閣僚会議に出席したは前例はない。1977年に彼女は中南米に政府の交渉の代表として行ったこともある。彼女はある重要案件で議論を十分に出来るほどに国家安全委員会から情報を得ていったが、中南米諸国の指導者達がいかに彼女と交渉したらいいのかわからなかったという。これがヒラリーとことなりあくまで政権の影で働く者の弱味であろう。

——ナンシー・レーガン（40代）：

夫の最大の保護者 ——

「夫のロンが靴を売り始めれば、私も靴を売り始める」と言ったように、ナンシーの夫への忠誠は素晴らしい。しかしロンを護るために閣僚のメンバーを解任に導いたりするナンシー・レーガンの夫への思いやりにはパット・ニクソンとは違った激しいものがある。ナンシーは外見の冷たさによりかなり損しているところがある。彼女自身不公平なマスコミの評価にかなり傷ついた。あるときに、有名なテレビ・キャスターのデビット・ブリンクリーに彼女はどうすれば自分のイメージを改善できるかたずねている。マスコミは彼女の多すぎるほどの高価な衣装や、陶磁器の購入などに目をとめ、ナンシーが身体障害者問題、麻薬問題に関して活動的に働いた事をあまり真剣に取り上げなかった。ナンシーはマスコミから過小評価されたファースト・レディーと言える。

——バーバラ・ブッシュ（41代）：

最後の伝統的なファースト・レディー ——

多くの孫達に囲まれたバーバラ・ブッシュのファースト・レディーのイメージは今後みられなくなるのではないだろうか。彼女の公的の仕事も問題をおこさないような文盲対策であった。1989年3月以来文盲をなくすためのバーバラ・ブッシュ基金ができています。彼女のイメージがマスコミによかったために、彼女もパーク・アベニューの衣袋

を沢山持っていたが、ナンシー レーガンのように問題にならなかった。ブッシュがクリントンに勝ち再びファースト レディになったならばと言う質問に対して彼女は次のように答えている。「今のままで変わらないだろ。朝晩に犬を散歩させ、パイキジをうまく作れないが、それを別に心配するようなことはない。ジョージが何処にいても私はその隣にいるだろう。たまには彼と大きく意見が異なることがあるかもしれない。そんな時は誰も見ていないところで、私は異を唱えるだろう。それは少し古くさいかもしれないが、彼への忠誠さと愛だ。このことは従属ではなく、私の名誉である。」

— ヒラリー（42代）：はどのタイプ —

ヒラリーの考え方がエレノア ルーズベルトやロザリン カーターの社会改革の観念に従っている一方、彼女のビル クリントンの操縦法をみるとネリー タフトとフローレンス ハーディングのやり方を思い出させる。ルーズベルトが大統領になるや始めた“暖炉を囲んでの語り”をまね、クリントンも“タウン ミーティング”をするなどクリントン夫妻がルーズベルト夫妻をまねていることは分かるが、大統領 100 日後の今のクリントン夫妻を評価すればルーズベルト夫妻にははるかおよばないことは確かである。むしろ 100 日後のクリントンの評価の落込みをみると第 2 のハーディング大統領への懸念もでる。

ヒラリーが職業人としての意識を持ち、財政的にも自立ができ、男女同権主義者であることから彼女がこれまでのファースト レディ達と異質であることに間違いはないが、彼女の最も素晴らしいところはエレノア ルーズベルトさえもできなかった仕事をするの喜びをはっきりと表しているところにある。そんなヒラリーへの批判をみていると、単にヒラリーがファースト レディの役割を変えるかという小さな問題ではなく、権力が女性の手の中に落ちていく時の米国民に深く

根づいている愛憎のふたつの価値観の問題のようにも思える。ヒラリー、ビル クリントン大統領夫妻が努力し米国民の健全な支持を受けフランクリン ルーズベルト大統領夫妻を超えるようになれば、米国は素晴らしい国になるだろう。

【主な参考文献】

- All The Presidents' Ladies by Peter Hay, A Penguin Book
- The Woman in White House by Marianne Means, Random House
- The Second Toughest Job by Margaret Truman, Parade August 15, 1982
- Untraditional First Lady by Ruth Rosen, Christian Science Monitor Sep.15, 1992
- Ladies of the House by Marilyn Johnson, Life Oct. 30 1992
- Powerful precedents by Cari S. Anthony, Chicago Tribune Mar. 7, 1993

United States President's & Wives

	LAST NAME	FIRST NAME	WIFE'S NAME	LIFE TERM	TERM
1	Washington	George	Martha	1732-1799	1789-1797
2	Adams	John	Abigail	1735-1826	1797-1801
3	Jefferson	Thomas	Martha	1743-1826	1801-1809
4	Madison	James	Dorothea (Dolly)	1751-1836	1809-1817
5	Monroe	James	Elizabeth	1758-1831	1817-1825
6	Adams	John Quincy	Louisa	1767-1848	1825-1829
7	Jackson	Andrew	Rachel	1767-1845	1829-1837
8	Buren	Martin	Hannah	1782-1862	1837-1841
9	Harrison	William	Anna	1773-1841	1841
10	Tyler	John	Letitia/Julia	1790-1862	1841-1845
11	Polk	James	Sarah	1795-1849	1845-1849
12	Taylor	Zachary	Margaret	1784-1850	1849-1850
13	Fillmore	Millard	Abigail/Caroline	1800-1874	1850-1853
14	Pierce	Franklin	Jane	1804-1869	1853-1857
15	Buchanan	James		1791-1868	1857-1861
16	Lincoln	Abraham	Mary	1809-1865	1861-1865
17	Johnson	Andrew	Eliza	1808-1875	1865-1869
18	Grant	Ulysses	Julia	1822-1885	1869-1877
19	Hayes	Rutherford	Lucy	1822-1893	1877-1881
20	Garfield	James	Lucretia	1831-1881	1881
21	Arthur	Chester	Ellen	1830-1886	1881-1885
22	Cleveland	Grover	Frances/Mary	1837-1908	1885-1889
23	Harrison	Benjamin	Caroline	1833-1901	1889-1893
24	Cleveland	Grover	Frances	1837-1908	1893-1897
25	Mckinley	William	Ida	1843-1901	1897-1901
26	Roosevlet	Theodore	Alice/Edith	1858-1919	1901-1909
27	Taft	William	Helen	1857-1930	1909-1913
28	Wilson	Thomas	Ellen/Edith	1856-1924	1913-1921
29	Harding	Warren	Florence	1865-1923	1921-1923
30	Coolidge	Calvin	Grace	1872-1933	1923-1929
31	Hoover	Herbert	Lou	1874-1964	1929-1933

	LAST NAME	FIRST NAME	WIFE'S NAME	LIFE TERM	TERM
32	Roosevelt	Franklin	Anna Eleanor	1882-1945	1933-1945
33	Truman	Harry	Elizabeth	1884-1972	1945-1953
34	Eisenhower	Dwight	Marie	1890-1969	1953-1961
35	Kennedy	John	Jacqueline	1917-1963	1961-1963
36	Johnson	Lyndon	Claudia	1908-1973	1963-1969
37	Nixon	Richard	Thelma	1913-	1969-1974
38	Ford	Gerald	Elizabeth (Betty)	1913-	1974-1977
39	Carter	James	Rosalynn	1924-	1977-1981
40	Reagan	Ronald	Nancy	1911-	1981-1989
41	Bush	George	Barbara	1924-	1989-1993
42	Clinton	William	Hilliary	1946-	1993-

WHERE SHE WORKS

